



関西大学図書館蔵抄本 『新刊監本増注司牧療馬安驥集』について

著者	玄 幸子
雑誌名	関西大学外国語学部紀要 = Journal of foreign language studies
巻	10
ページ	71-82
発行年	2014-03
その他のタイトル	關於關西大學圖書館所藏的抄寫本《新刊監本?注司牧療馬安驥集》
URL	http://hdl.handle.net/10112/9636

関西大学図書館蔵抄本 『新刊監本増注司牧療馬安驥集』について

關於關西大學圖書館所藏的抄寫本《新刊監本増注司牧療馬安驥集》

玄 幸 子
Yukiko Gen

提剛

《司牧安驥集》是醫馬書古典著作之一，唐代李石撰的。原書早就遺失，現在能目睹的只有明代増注本。關西大學圖書館所藏的《新刊監本増注司牧療馬安驥集》是抄寫明代弘治 17 年重刊的。現在《司牧安驥集》系列的版本稀有，明代弘治 17 年重刊本都有兩種，個個只流傳下一本：南京圖書館藏本與日本市立米澤圖書館藏本，關西大學圖書館所藏本屬於米澤圖書館藏本系列，而且有些部分反映了更早時期的版本，是極其重要的史料。以後通過詳細調查此件抄寫本，可能進行《司牧安驥集》之綜合系統研究而明確此件史料原貌與流傳情況。

キーワード（關鍵詞）

司牧療馬安驥集（司牧療馬安驥集）、馬醫書（醫馬書）、書写本（抄寫本）、口語史料

『安驥集』とは一般に『司牧安驥集』を指し、獣医学書のなかでも馬に関する最も早い時期の医書、いわば馬医書の古典である。記録に残る限りにおいて中国唐代の李石の撰、成書年代はほぼ唐末とされる。また李石の原書は現在伝わらず、明代重刊本が僅かに残されているのみである。

さて、本学図書館には抄本『新刊監本増注司牧療馬安驥集』（請求番号 *645.26*C1*1-1/2、*645.26*C1*1-3/4）が所蔵されている。明代重刊本を書写したものであることはその内容から明らかであるが、書写年・書写した人物の詳細は記されていない。底本の明代重刊本は、恐らく量的に大部の刊行事実があったには違いないのだが、実用書の定めに違わず現在ほぼ散逸しており完本は確認できないとされる。今回取り上げる抄本『療馬安驥集』¹⁾は、底本の完本が散逸している現状にあって、抄本とはいえ底本の姿を写している数少ない史料であるという点で非常に貴重な存在であるといえよう。本稿では、本学図書館蔵抄本『新刊監本増注司牧療馬安驥集』の概要を紹介し、その特徴と史料価値について分析する。

馬医書『安驥集』系統の版本と歴史

抄本『療馬安驥集』の検討に入る前に馬医書『安驥集』についてその版本と流伝の歴史を概観しておく。まず、李石撰『司牧安驥集』に関しては『宋史』卷二百七「藝文志」第一百六十に「李石司牧安驥集三卷、又司牧安驥方一卷」と著録されるのが最も早期の記述である。また清沈青峰『(雍正)陝西通志』卷七十五「經籍第二 子類 集類」には「司牧安驥方一卷、司牧安驥集三卷、俱唐宗室司馬李石撰」とある。では、唐宗室司馬李石とは如何なる人物か。『舊唐書』卷一百七十二「列傳」第一百二十二「李石」を引用する：

李石字中玉，隴西人。祖堅，父明。石，元和十三年進士擢第，從涼國公李聽歷四鎮從事。石機辯有方略，尤精吏術，藩府稱之。自聽征伐，常司留使務，事無不辦。大和三年，為鄭滑行軍司馬。時聽握兵河北，令石入朝奏事，占對明辯，文宗目而嘉之。府罷，入為工部郎中，判鹽鐵案。五年，改刑部郎中。由兵部郎中令狐楚請為太原節度副使。七年，拜給事中。九年七月，權知京兆尹事。十月，遷戶部侍郎，判度支事。

これに拠れば、李石は字中玉、隴西（現在甘肅省）の人である。元和十三年（818）の進士、大和三年（829）に鄭滑行軍司馬²⁾となり、各種官職を歴任しつつ、2年後の大和五年（831）には令狐楚に請われて太原節度副使となるなど主に軍隊における重要な官職にあった人物である。当然軍馬の管理もその職務の範疇にあったことを考えれば、『司牧安驥集』を撰した可能性は大きいといえよう。また、『(雍正)陝西通志』の記述によるならば、「司馬」の職にあった時が撰述の時期であり、830年前後と考えられる。

現在目にすることのできる史料は、中国においても殆ど残されておらず、南京図書館の善本書庫に所蔵される明の弘治十七年（1504）重刊本『安驥集』五卷が最も古い天下の孤本とされる。そこでこれに基づき1957年に中華書局から謝成俠校勘《司牧安驥集》五卷が出版された³⁾。この弘治本には「新刊校正安驥集序」「重刊安驥集序」の二つの序文が本文の前に置かれており、新刊、重刊の刊行の経緯を読み取ることができる。以下に古い順に引用すると⁴⁾：

新刊校正安驥集序

尚書兵部，阜昌五年（1134）十一月二十四日，准内降付下都省奏朝散大夫，尚書戸部郎中，兼權侍郎，權兵部侍郎馮長寧等劄子，成忠郎皇城司，準備差遣權大總管府都轄官，兼權帳前統領軍馬盧元寶，進呈司牧安驥集方四冊。奉齊旨可，看詳開印施行。此政令之急務，長靈（寧？）等嘗觀周禮夏官，列校趣巫牧瘦（廩）圉之職，其言乘皐既校之數，芻秣阜蕃之事，稱治醫養之宜，與夫祭祀之禮，政執之時，各有條理。禮記月令，又載班馬政，……自張萬歲失職，馬政遂廢。及王毛仲領職，馬稍復，始二十四

萬，至十三年，乃四十三萬。天寶以後，諸軍戰馬，動以萬計，議者謂，秦漢以來，唐為最多，豈非息耗雖因時，而尤在牧養得其法與。國家乘前宋亂忙之後，常黎元塗炭之餘，披榛棘而洗瘡痍，拯水火而屏豺虎，安民和眾，不得已而用兵。強兵之本，以騎為先，故遣官市馬於隴右，網維繼至，馬數漸廣。尚慮孳育之未審，詔脩馬政，始命有司看詳司牧安驥集方開印，以廣其傳，庶幾市者驗此，以知驚驥，醫者考此，以用灌針，牧者觀此，以適其水草之齊。救執之宜如此，則司馬之法，不獨稱於周官，而牧監監牧之多，匪專美於有唐也。今修寫到板樣繳呈，乞詳酌降下，開印施行。本省尋具奏稟，取進止，奉齊旨並依。

阜昌というのは劉豫の年号である。北宋末、金の傀儡政権であり8年しか続かなかったため偽齊とよばれる。阜昌五年は1134年に当たる。ここでは、馬政の重要性を周礼から説きはじめ、最も盛んであった唐代の趨勢を張萬歳や王毛仲などを引いて具体的に述べている。戦乱で疲弊した民衆を安んずるためやむをえず軍兵を使うが、最も重要なのは馬政であり、『司牧安驥集方』を詳査し刊行することが急務であると述べている。この『司牧安驥集方四冊』は当然唐宗李石の『司牧安驥集』三巻および『司牧安驥方』一巻を指すと考えられる。これ以降最終的に八巻本へと増補されていくことになる。

重刊安驥集序

安驥集者，本自黃帝八十一問以來蓋已有之。其訂馬骨相，論馬證治，施鍼用藥，悉有根據，歷千百世之為馬醫者，莫之能違也。洪惟我國家經理疆土，以關陝為西北重地，設寺監以司馬政，苑牧有地，孳息有制，所以為防邊，固國之計者至矣。奈何承平日久，民生不見干戈，視馬政為常事，居是識者，率皆因陋就簡，日積月累，消耗殆盡。皇上居安思危，欲圖興復，用紓西顧之憂，乃采廷議，以南京太常卿遼菴楊先生⁵⁾，文章政事，為天下望，遂進都察院左副都御史，督理其事。璽書丁寧，命以提督便宜之權。先生既至，凡百廢典，次第盡興舉之。靈始被委清理，既而荷簡命為清，寔任其責焉。先生猶慮監苑久無良醫，馬病則束手待斃，恐難收藩息之效，於是命靈選取各監苑俊秀可學子弟，幾數十名，延請諳曉醫師，以專訓迪。顧安驥集板行已久，多漫滅不可讀，且陝西地僻遠，鬻書者不易致，先生乃取善本，稍加校閱，命工鉅梓，遍給暨苑監諸衛所邊堡，俾師以是而教，子弟以是而學。嗚呼，是集也，調養有法，醫療有方，將自是全陝之馬，可免橫災，可冀蕃息，是亦吾儒愛物立教之一端也。他日駉牝蔽野，雲錦成群，以無負皇上興復之志，於三邊兵事，大有裨益，不于是而始邪。刻既完，靈僭為之序，用紀歲月云

弘治十七年（1504）甲子夏，六月既望，太中大夫陝西苑馬寺卿，前陝西等處承宣布政使司，右叅政太原車靈序。

弘治十七年(1504)のこの序文からは、辺防の強化のために馬政を大きく改革した明代の具体像が見えてくる。南京太常卿楊一清の命によって陝西苑馬寺卿車霆に優秀な子弟を数十名集め、馬の病気に対処するため腕の良い医者に教えさせた事が見える。また、同じ箇所にも、『安驥集』の版木が長期の使用で摩滅してしまい読めなくなっていることを鑑みて楊一清自身が善本を選び多少校閲を加えて印刷させ、衛や所、辺境の守りにまで配布して、これを教えさせたことを記している。この序文からは『安驥集』が何巻本であったのか、その内容などを知る手がかりはない。

鄒介正・和文龍《司牧安驥集校註》八巻は南京図書館蔵本を底本とし北京図書館蔵諸残巻本を集成して八巻を再現した成果であるが、現在一九九七年に出版された『四庫存目叢書』(子54・医家類)には、北京図書館蔵明萬曆二十一年の張世則刻本『司牧安驥集』八巻が収録されている。この萬曆本を前述した南京図書館蔵本「新刊校正安驥集序」の半葉(影印部)と比較対照すると、ほぼ同じ版であることがわかる。

抄本『療馬安驥集』について

では、本題に入ろう。まず初めに基本的な書誌情報については次の通りである。

表題 新刊監本増注司牧療馬安驥集 / 明・張穆仲撰
形態 [江戸時代?] 写本 : [出版者不明],
2冊; 19.5 × 26.5cm 線装本袋綴(4つ目綴)
1冊目巻1~2、2冊目巻3~4

注記 明・弘治17年(1504)序 金陵唐渲洲刊本の写本

本文中にとりどころ朱線が引いてあり、また、余白に書き込みが多々見られる。上下の書き込み部が切れているところを確認でき、これは本来さらに大きな版であったものを何らかの理由で上下を切りそろえたものと推測される。

次に構成であるが、南京図書館本と比較して大きな違いは次の2点である。

その1、「新刊校正安驥集序」を欠く

その2、「目録」がある

「新刊校正安驥集序」については先にみたとおりである。なぜ欠けているのかは今後検討の余地はあろうかと思われる。本史料では代わりに車霆の「重刊安驥集序」の後に「目録」があり、本文へと続いている。「目録」を以下に引く。

新刊監本増注司牧療馬安驥集

起復承事郎尚書兵部員外郎張穆仲編

通直郎尚書兵部員外郎蔡如稜續神（補）

朝散大夫尚書戸部郎中掌權兵部侍郎 馮長寧校勘正

第一卷

伯樂相良馬圖	相良馬論
相良馬寶金篇	施毛圖
施毛論	口齒圖
口齒論	骨名圖
穴名圖	伯樂鍼經
王良百一歌	伯樂書（畫）烙圖并歌訣
伯樂十二經絡圖并井荈歌 ⁶⁾	

第二卷

馬師皇五臟論
馬師皇八邪論
王良先師天地五臟論
胡先生清濁五臟論
碎金五臟論
起臥入牛（手）論
造父八十一難經
天王七十二大病

第三卷

新添注三十六黃	新添二十四黃
軒轅岐伯瘡腫方論	取槽結穴
伯樂放血	

第四卷

新添連相注三十六起臥

第五卷

新添黃帝八十一門（問）

第六卷

七十二惡汗病源歌	
一十六般蹄頭痛	騰駒牧養法

第七卷

雜論一十八大病	雜病歌
---------	-----

増補經驗藥方

第八卷

續添蕃牧纂經驗方論

新刊監本増注司牧安驥集總目終

この「目録」により八巻本であることは明白であるが、残念ながら本文は「起臥病源歌四巻終」で2冊目が終わっていて、残りの第五、六、七、八巻を欠く。また、それぞれの内題に目録と異同がある。実際の内題は次の通りである。

第一巻 (表題なし)

良馬相圖

相良馬論

相良馬寶金篇

良馬施毛圖

施毛論

口齒圖

口齒論

(骨名圖)

穴名圖

伯樂鍼經

王良百一歌

續添伯樂畫烙圖并歌訣

六陽之圖六陰之圖

重刻司牧安驥集卷二

馬師皇五臟論

馬師皇八邪論

王良先師天地五臟論

胡先生清濁五臟論

碎金五臟論

起臥入牛(手)論

造父八十一難經

看馬五臟變動形相七十二大病

補足1葉 (伯樂十二經絡圖并并荈歌)

重刻監本増廣補注安驥集卷三

古唐洞羊賈 誠 重校

天王直三十六黃病源歌
治二十四黃
岐伯瘡腫病源論
取槽結法
放血法
安驥集卷之三終
第四卷（表題なし）
第一前結起臥病源歌から第三十六邪病臥病源歌まで（附上半葉凶象）
起臥病源歌四卷終

ここで注目に値するのは第二冊目の第三巻の前に補足で添えられている一葉である。内容は次の通りである。

（表）

安一卷六陽六陰之圖ノ次ニ古版ノ安ニ在之⁷新刊ニハナシ
井榮（榮）歌 甲胆乙肝丙小腸 丁心戊胃己脾（脾）章（鄉） 庚屬大腸辛晨肺 壬曰
膀胱癸腎堂 又歌 井榮（榮）流傳十坐門 陽日陰日亦流傳 陽井便還陽井出 陰井元
來陰井輪 陽日衛先前面走 陰日榮（榮）先衛後巡 週而復始相流傳 一万三千五百尋
血行十二支法 子胆丑肝子（寅）三焦 卯大辰胃巳脾招 午心未小申膀上 亥肺酉腎
戌在 包一万三千五百數 用意消詳會者高 都來八百一十文畫 夜百刻定為遭
四季月榮（榮）血行法 春刺井木肝經行 夏刺南方心火榮（榮） 脾到土膈仲復管
秋刺金肺在經提 冬合腎水井榮（榮）法 五臟周而轉又平 若人會者消詳此四季井按五
行 又歌曰 甲胆井下小腸榮（榮） 胃膈送下大腸經 膀胱為合傳轉下周而復始好消詳
又歌曰 乙肝井下心為榮（榮） 脾膈肺經胃合停 五臟六腑逆須子細思量須要明

十二經穴法

眼脉厥陰肝之經	前堂少陰心之經	鶻脉大陰肺之經
交堂少陰腎之經	勞堂少陽膽之經	同舛大陽小腸經
曲池陽明胃之經	蹄頭少陽三焦經	尾脉大腸膀胱經

（裏）

類聚針經 七十二惡汗 王良百一歌 三十六黃 二十四黃 …… 三十六起臥

この一葉は、「目録」では第一巻の最後に「伯樂十二經絡圖并井榮歌」とあるところ、実際は「六陽六陰之圖」となっている箇所についての補足だと思われる。「古版」「新刊」を比較して書写していたことがこれによりわかるが、「古版」「新刊」が具体的に何を指すのか史料不足により

現在のところ不明である。また、「伯樂十二経絡圖并井榮歌」についても他の資料中に見出すことができない。逆にこの箇所は「古版」の一部を伝える貴重な史料であるということになる⁸⁾。

さてこの抄本『療馬安驥集』は第1冊目の封面に大きく三行にわたり「鐫官版療馬安驥集」そして「//」部に「金陵書坊唐渲洲刊行」と書写され罫線は一部にのみみられるだけだが匡郭などからも版本の姿を忠実に写し取ろうとする姿勢が明らかである。では、その底本が問題となるが、同じく弘治十七年の序文を有する南京図書館本系列の他本と一葉の行数、一行あたりの文字数ほか、体裁もまったく合致しない。となると、抄本『療馬安驥集』の底本は他にある可能性が高いといえよう。次に底本について考察をする。

市立米澤図書館蔵『司牧療馬安驥集 7巻附1巻』

さて抄本『療馬安驥集』の底本であるが、結論から先に述べれば市立米澤図書館蔵『司牧療馬安驥集 7巻附1巻』本系列であると同定できよう。現在同図書館ではありがたいことに同資料をデジタル公開しており、web上で精細なカラー写真を確認できる⁹⁾。抄本『療馬安驥集』と比較対照した結果、体裁・内容についてはほぼ一致することが確認できた。両者を対照した結果、異同が確認できた点について最初の目録部までを示すと次の通りである。

	米澤本	抄本
序 1b-5	西顧	西顧之
序 1b-6	之憂乃	憂乃
序 2b-3	先生乃取	先生及取
序 2b-4	給監	給監苑
序 2b-5	苑暨諸	暨諸
目乙 1a-3	續補	續紳
目乙 1b-9	起臥入手論	起臥入牛論
目 2a-8	八十一問	八十一門
目 2a-11	蹄痛病	蹄頭痛

上記をみても殆ど異同がないといっても良からう。むしろ、本文の順序について米澤本が「旋毛論」と「口齒圖」を逆順にしてしまい「目録」と整合性を欠く結果になっているのに対して、抄本のほうは正しい順序で配列されていることをみれば、抄本の拠った底本がより整ったものであった可能性も考えられる。

米澤本に関しては、『米澤善本の研究と解題』（内田智雄編集 1958年 ハーバード・燕京・同志社 東方文化講座委員会）の中に詳細かつ的を得た解題があるので引用する。

新刊監本増注司牧療馬安驥集七卷 坴蕃牧纂驗方一卷

金張穆仲輯 明蔡如稜續補 附録王愈編 弘治十七年序刊本

每半葉匡郭縦二二. 八糶横一三. 五糶、十一行行二十八字、白口單邊有界。版心は「安驥集」。はじめに弘治十七年、太中大夫陝西苑馬寺卿前陝西等處承宣布政使司右參政の車震の序があり、都察院左副都御史楊邃庵の命を受けて馬政を改善するとともに、本書を刊行してこれに従事するものの指針とした由來が記されている。つぎに目録があるが、これに起復承事郎尚書兵部員外郎張穆仲編、通直郎尚書兵部員外郎蔡如稜續補、朝散大夫尚書戸部郎中掌權兵部侍郎 馮長寧校勘正とみえる。卷一と卷四とには内題がないが、その他にはそれぞれ重刻司牧安驥集卷二、重刻監本増廣補注安驥集卷三、重刊増廣監本補闕注解安驥集卷第五、同第六、重刊増補安驥藥方第七とあり、卷三、五、六には古唐洞羊賈誠重校または校勘とある。馬の良悪の鑑別法のほか、主として馬の疾病とその治療法に關する書で、豊富な圖とともに内容はほとんど歌謡の型式をとり、無學のものにも記憶しやすいようにしてあるのは興味深い。わが國にも早くから傳わり、戰國時代にはすでに和譯本もつくられている。『四庫全書總目提要』の子部醫家類存目の條に、「安驥集三卷」が永樂大典本として著録されておいて、これには馮長寧の序があり、それによると、齊の阜昌五年（一一三四年）盧元賓というものが司牧安驥集方四冊を進呈したので、政府でこれを出版することとなり、張寧がその責任者となったということである。齊とは北宋の末、女眞の占領區域となった中國北部に成立した傀儡政權で、馮長寧の名は偽齊錄のうちにもみえている。『宋史』藝文志のうちに、李石の著として「司牧安驥集三卷」「司牧安驥方一卷」が録されているが、これがもとなり張仲穆らの編輯増補をへて今日の形となったのであろうか。一九五七年、中國の中華書局から南京圖書館藏本によって謝成俠氏の校勘した『司牧安驥集』が出版されたが、やはり同じ弘治十七年本によっている。しかし、これには馮長寧の序はあるが、内容は五卷しかなく、目録も缺いている。謝氏はそれを海内の孤本のごとくいつているが、本館本はわずかに馮序を缺くのみで、内容は完全である。また南京圖書館藏本には藥方がないが、もともとあったことは『四庫全書總目提要』にも、末に藥方を附すといつているのによって明らかである。卷八は附録ともいべき蕃牧纂驗方で、奉議郎提舉京西路給地馬牧馬王愈編集とあり、四時調査之宜、治心部、治肝部、治脾部、治肺部、治腎部、雜治部の七項に分かれている。每冊「麻谷藏書」印あり。（一四一頁）

市立米澤図書館に所蔵される和漢書の多くが上杉家藩学であった興讓館の蔵書であり、そのなかで米澤城に収蔵されるものには「米澤藏書」の印が捺されているのに対して「麻谷藏書」の

印を捺されたものは江戸の上杉家麻布邸に収儲され、元禄十二年までに米澤へ運ばれてきたものである¹⁰⁾。

さて、この解題から米澤本は「新刊校正安驥集序」を欠くものの、完本であり、より完備された史料として大きな価値を持つことが明らかである。しかも、中村七三氏の詳細な研究¹¹⁾では、日本で爆発的に多く使用された和訳本『假名安驥集』の底本がこの米澤本系統であると結論づけている。

では米澤本『安驥集』はこの米澤本系統を底本としていつ書写されたのか。日本では慶長九年(1604)に古活字本で『假名安驥集』十二巻が上梓されてからは、『安驥集』は徐々に顧みられなくなった。よって抄本『療馬安驥集』はそれ以前に書写された可能性が高い。また、書き込み状況から、『假名安驥集』へ移行する途中経過を見て取ることも可能であるが、この点に関する詳細な検討は後日に改める。

まとめ

抄本『療馬安驥集』の検討を通じて知りえたことは、弘治十七年の序文をもつ『司牧安驥集』には少なくとも2種類の版本があり、中国南京図書館蔵本の系統と日本市立米澤図書館蔵本の系統がそれぞれである。本学図書館蔵抄本『新刊監本増注司牧療馬安驥集』は米澤本系統の版本を忠実に書写したものであり、さらに米澤本には収録されていない「伯樂十二経絡」と「井荂歌」についての補注を記している。また、「古版」「新刊」の2種を対照しつつ書写したことが、補注および文中の書き込みより知れる。「古版」が何を指すのか、現在未詳であるが、米澤本系統の版本より古い版を対照した可能性がある。また、書き込みと『假名安驥集』との関連についても、今後検討する必要があるだろう。

様々な角度から重要な情報を提供してくれる本史料は、残された資料の少なさ、ほかに見られない補注を有する点等々、あらゆる意味に於いて貴重である。

【余論】

最後に余論として、本資料の口語史研究における意味について補足しておく。太田辰夫著『中国語歴史文法』(1958年 江南書院)では《怎麼》(p.309)の項目に〈怎生〉をとりあげ次のように説明する：

《作勿》などの音が縮約されて一音となり、これを《怎》で書くことが五代の頃から一部でおこなわれるようになった。したがって《生》のついたものは《怎生》となった。

怎生得受菩提記?(維摩變文 P.2922)

(どうして菩提の記をうけることができようか)

さて、この「怎生」であるが、現代語の常用疑問詞「怎麼」に繋がる非常に口語性の強い語彙

である。ただし、史料上では唐代以前にはほとんど目にするのではなく、唐代口語資料である敦煌変文のなかでも五代の成書と考えられる『維摩變文』¹²⁾にまともって6例みられるだけである。ところが『司牧安驥集』の中に全4例を確認することができる。とりわけ、巻二の次の2つの用例は唐代の言語をそのまま反映記録したものと考えられ、そうだとすれば、この用例が「怎生」の最も早い使用例ということになる。

〈馬師皇五臟論〉

造父八十一難經

- 十九難病肺家類 鼻中氣響似鈴揚
膿血噴下腥穢臭 腦中空病怎生當
除却開喉斷絕得 醫藥饒伊有萬方
須要羊頭取熱腦 開之裏面貼其瘡
有効不過三五日 醫家用意莫胡忙 ……
- 二十七難是肝脹 說與明人怎生向
不過三日身必死 難經論裏無方狀
報知後代醫工者 下藥無効空惆悵

『司牧安驥集』は口語をよく反映した史料として捉えられ¹³⁾、口語史研究の上でも重要な位置を占めている。抄本『療馬安驥集』により史料としての成立過程、伝播形態などが一層明らかになれば、その史料価値をゆるぎないものとして確定することも可能である。今後詳細な検討を通じて、その全貌を明らかにしていく必要がある。

【注釈】

- 1) 以下抄本『新刊監本増注司牧療馬安驥集』を抄本『療馬安驥集』と略称する。
- 2) 行軍司馬は唐代では節度使の下に置かれ現代の参謀長のような役目を果たした。
- 3) その後鄒介正の校註と補闕になる《司牧安驥集校註》八卷（1959年農業出版社 未見）、鄒介正と和文龍の校註本《司牧安驥集校註》八卷（2001年農業出版社）、裴耀卿が整理した《司牧安驥集語釋》八卷（2004年中國農業出版社）が出版されている。
- 4) 南京図書館所蔵の原本は未見である。よってここでは、1957年中華書局校点本によらざるを得ない。が、『四庫存目叢書』に収められる「安驥集」八卷（明萬曆21年刊 張世則刻本）は1957年中華書局校点本の巻頭に附される影印1枚と対照する限りにおいて、ほぼ同一版と思われる。よって、萬曆21年刊行本と随時対照しつつ校録する。
- 5) 楊一清（1454～1530）安寧（雲南省）の人。字は応寧。成化8年（1472）の進士。劉大夏の薦学で弘治15年（1502）に陝西巡撫となる。陝甘の軍務を総制し、馬政の整備による辺防の強化などに尽力した。明孫旬『皇明疏鈔』卷六十三に「陝西馬政疏」「再議陝西馬政疏」が採録され、車雲の奏上を採用した事などが見える。

- 6) 実際は「六陽六陰之圖」である。
- 7) 返り点がついているので「之在」である。
- 8) 本文中の書き込みの中にも「古版」を引く箇所がみられる。書き込みを詳細に検討することで「古版」についての情報はある程度得られるものと思われる。
- 9) 市立米澤図書館デジタルライブラリー『司牧療馬安驥集 7巻附1巻』<http://www.library.yonezawa.yamagata.jp/dg/AA045.html>
- 10) 市立米澤図書館所蔵本の詳細については「米澤藩學とその圖書の歴史」(前掲書『米澤善本の研究と解題』所収、pp. 3-24)に詳しい。
- 11) 中村七三編著『馬醫版本の研究 本編・資料①・資料②・資料③』(盛岡 稱徳館 1998)を参照。
- 12) P.2922の『維摩詰経講經文』はその最後に「廣政十年八月九日在西川静真禪院寫此第廿卷文書」と紀年があるので、書写時を947年とみることができる。
- 13) 曹小雲〈試論古獸醫書《司牧安驥集》在漢語詞彙史研究上的語料價值〉(《開篇》2007年 東京)は口語史史料としての《司牧安驥集》を評価するものである。

【引用・参考文献】

(日本での出版物)

内田智雄編集『米澤善本の研究と解題』、1958年、ハーバード・燕京・同志社 東方文化講座委員会

中村七三編著『馬醫版本の研究 本編・資料①・資料②・資料③』、1998年、稱徳館

曹小雲〈試論古獸醫書《司牧安驥集》在漢語詞彙史研究上的語料價值〉、2007年、《開篇》東京

(中国での出版物)

謝成俠校勘《司牧安驥集》五卷、1957年、中華書局

郷介正・和文龍校註本《司牧安驥集校註》八卷、2001年、農業出版社

裴耀卿《司牧安驥集語釋》八卷、2004年、中國農業出版社

(デジタルライブラリーなど)

1、市立米澤図書館デジタルライブラリー

司牧療馬安驥集 7巻附1巻

<http://www.library.yonezawa.yamagata.jp/dg/AA045.html>

2、麻布大学附属学術情報センター

獣医学関係資料デジタルアーカイブ 古典籍コレクション

仮名安驥集 (巻第一・二／巻第九・十／巻第十一)

<http://turf.azabu-u.ac.jp/htmls-201202/items/S003.html>

《付記》本稿は日本学術振興会科学研究費補助金「中国典籍日本古写本の研究」(基盤A、研究代表者：高田時雄 京都大学人文科学研究所教授)による研究成果の一部である。